

2019年1月NHK東北地方放送番組審議会

1月のNHK東北地方放送番組審議会は、17日(木)、NHK仙台放送局第1会議室において、9人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、11月4日(日)目撃!につぼん「記憶と向きあう～作家・柳美里と高校生～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、2月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	津田 政克	((株)七十七銀行 常務取締役)
副委員長	藤村 ゆき	((株)健康米味楽農場 代表取締役)
委員	相原 和裕	(河北新報社 論説委員会委員長)
	桂木 宣均	(日本地下水開発(株) 代表取締役社長)
	坂田 裕一	(NPO法人いわてアートサポートセンター 理事長)
	佐藤 美嶺	(防災士)
	西内 みなみ	(桜の聖母短期大学 学長)
	長谷川 登	(東北電力株式会社 取締役 常務執行役員)
	山田 理恵	(東北電子産業(株) 代表取締役社長)

(主な発言)

<目撃!につぼん「記憶と向きあう～作家・柳美里と高校生～」

(総合 11月4日(日)放送)について>

- 2回ほど繰り返して見たが、番組全体の背景がつかみ切れなかった。見終わった後にインターネットで調べたら、美術アドバイザーや華道家、舞台照明の専門家も関わり、生徒たちはチームに分かれて公演をしたということだった。背景についてももう少し詳しい説明があれば分かりやすかったと思う。

生徒の幼い日の大切な思い出が語られたが、彼らにとっては重要な場面だと思うが、そういう場面だけが編集されているので、全体の重みやその場で演劇を見ていたらもっと心にずっしり響くような思いのようなものが番組からは伝わりにくかった。

今回は柳さんが演劇部の生徒たちの気持ちを引き出し、記憶をたどる作業をしていたが、ほかの多くの高校生にとっても必要なことで貴重な経験になるのではない

かと思った。

- 東日本大震災が発生した当時小学生だった子どもたちが、夏の記憶を少しずつこじ開けていく様子や最後にその記憶を劇で演じるというその作り込みは、大変すばらしかったと思う。番組では、重い迷いを持っていた二人の男子生徒に焦点を当てていた。自分のふるさとに対して、最初は「好きだけど好きな場所がない」と話した広野町出身の生徒。最終的には「建物が建って町の風景は変わったけど、海は変わらなくてきれいって言える自信がある」と言った場面で迷いが少し吹っ切れたようだった。福島市出身で自分には震災を語る資格はないと迷う生徒に対し、柳さんが「距離があるからこそ逆に知りたいという磁力が強い。」と語りかけていた。この二人のエピソードは非常に感動的だった。

- 舞台の制作過程を丁寧に描いた、ドキュメンタリー番組だが、この番組そのものがいいドラマになっていて、共感しながら見た。高校生たちが小学生のときに経験した東日本大震災、東京電力福島第一原子力発電所の事故、避難生活、それから津波で破壊された町に対する高校生たちの思いがストレートに伝わってくる作り方だったと思う。いつも明るく笑い転げているような高校生たちが実は心の底に複雑な感情、封印してきた記憶を抱えていて、それを柳さんがユニークな演劇指導で引き出していくプロセスが感動的な印象を与えた。高校生たちも真剣に取り組んでいる様子がよく伝わってきた。

高校生たちの演劇が番組の中で劇中劇のように描かれ重層的な効果はあったと思うが、もう少し演劇の中身自体が伝わるように、内容説明の部分に時間をとってよかったのではないかな。

- 感想がことばにならないほど感動し泣きながら見た。東日本大震災直後の記憶は、思い出したくない記憶として思い出さないようにしてきたことを改めて思い出させてもらった。自分の記憶を振り返り、その記憶に対峙する時間になった気がする。

当事者でなければ震災を語る資格はないのではないかなという戸惑いは、多くの人が持ち続けていることだと思う。柳さんが「自分は在日韓国人だけど、韓国語はしゃべれない。だけれどもある思いはある。」という話にとっても勇気づけられた。柳さんがすばらしいのは、忘れ去られようとしている現実きちんと向き合い、付き添って伴走していることだと思う。東日本大震災前の記憶を高校生にもう一度取り戻させながら、彼らが失ったものは何か、この先何を大切にしていけるべきかを考えさせ

ていた。過去の変えることのできない出来事として捉えるのではなく、未来を見て、今の自分を考えさせてくれる内容構成になっていて、とてもよかった。

- 柳さんの「聞き手がいれば、そこに向かって悲しみを流すことができる」という言葉が印象的だった。演劇部の生徒たちは、演劇で表現することによって、自分の気持ちを整理して悲しみを流すことができたのかもしれないと思った。広野町出身の生徒の思いと福島市出身の生徒の思いに焦点を絞って構成していたのはとてもよかったと思う。広野町出身の生徒が言っていた「好きなところが思い浮かばない。でも嫌いじゃない」という複雑な気持ちは、避難して町を離れた経験のある人の多くが抱えている感情だと思う。また、福島市出身の生徒が「当事者じゃないから、ほかの人よりも気持ちがわからない」という悩みは、多くの人が抱えている感情だと思う。その悩みに、「距離があるからこそ知りたいと思う気持ちが強くなるのではないか」と柳さんが答えたシーンでは、見ていて少し心が軽くなるような気がした。

演劇が終わった後の生徒たちのやり切った笑顔が印象的だったが、生徒たちが一生懸命表現しているのが演劇全体のどういう場面で使われたのかが全くわからなかった。劇の内容についてももう少し説明してほしかった。

- この番組は、高校生の気持ちの変化を捉えていたが、同時に柳さんのすばらしいことばもきちんと番組の中で捉えていた。「記憶の中の風景を大切にすることが必要」、「悲しみは聞き手がいればそこに向かって流すことができる」などのことばは、演劇が何をしなければならぬのかという柳さんの答えのような気がする。

福島市出身の生徒が、当事者ではないから語ってはいけないのではないかと悩んでいるときに、柳さんは「当事者じゃないから、遠くにいるからこそ、より知ろうと思うんじゃないの」と語りかけた。それこそが柳さんの思いだったのだと思う。

高校生の舞台成果としての番組ではなくて、これは柳さんの思いを描いた番組だったように感じた。

ナレーションの声質はとてもよかったが、アクセントの位置や間合いのとり方をもう少し演出側が指導すべきだったと思う。高校生目線のナレーションとしてはよかったと思うが、柳さんの気持ちを伝えることを考えるともう少し違う人選もあったのではないかな。

- 柳さんが3年前に南相馬市に移住したときの背景について、もっと説明があってもよかったのではないかな。

高校生たちの素直なことばや様子から、ディレクターが高校生と心を通わせながらいい関係を作って撮影をしていたことが伝わり、非常に好感が持てた。

柳さんのことばをさまざまな場面で取り上げて、上手に使っていたと思う。「記憶の中の風景は棄損されない。それを大事にすればきらめきが残っていく」ということばが印象的だった。柳さんは、東日本大震災を経験した人にこのきらめきを思い出してほしいと思っているのだと感じた。それが癒しや救いになって震災後を生きるということにつながるというメッセージなのだと感じた。

- 番組の中で、柳さんの髪型が長かったり、短かったり変化していて、時間の流れがよくわからなくなった。演劇の本番まであと何日など、時系列が分かる情報を画面表記してもらえればもっと入り込んで見られたような気がする。

柳さんの「悲しみは聞き手がいなければそれは流れない。悲しみを孤立させない」ということばが一番印象に残った。また実際に避難はしていないので当事者ではないと悩む生徒に「知りたいという心の磁力がすばらしい」と諭す場面は、柳さんが心で向き合っているのが伝わり感動的だった。

最後に柳さんが生徒たちが乗ったバスを見送る場面で締めくくっていたが、とても温かい気持ちになった。被災した子どもが今高校生になって被災の記憶を語ることができる最後の子どもだということに目をつけたのはとても意義のあることだと思う。

- 高校生の東日本大震災以降の夏の記憶がないということばが胸に残った。子どもに限らず、ふるさとを失った人、ふるさとの景色が変わってしまった人のことばなのだと思う。柳さんは、南相馬市に移住して、生活し、福島の人々の思いに近づこうとしている作家なので、子どもたちの思いや悩みに踏み込めたのだと思う。柳さんの「悲しみは聞き手がいなければそれは流れない。悲しみを孤立させない」ということばに共感した。東日本大震災は、ほかの災害と比べ物にならないくらい被災者の数が多い。そのため自分だけが悲しいのではない、ことばに出してはいけないと、心にふたをし、ことばにできない人が多いと思う。その多くの人の悲しみを理解し、心を解き放せることは重要なことだと思う。番組は、子どもたちの思いや悩みを丁寧にひもとく柳さん、対話の中で悩みながらも今を受け入れ、前に進んでいく高校生の姿と心情の変化を生徒たちの目線で描いていた。最後の演劇の場面では、頑張れという思いで涙が出てきた。今後も多くの人の心に寄り添った番組をお願いしたい。

○ この番組を見て「不条理」ということばが頭に浮かんだ。東日本大震災や原発事故が起きたという事実は、どれほど努力しても変えられない事で、被災者や柳さんにとってもやりきれないことだと思う。在日韓国人の作家である柳さん自身の体験から得た「不条理」をもっと深く掘り起こして高校生たちを鼓舞してほしい。

人生は不条理との戦いの連続だと思う。大きな苦しみも深い悲しみもいつか思い出にするような人間の強さを柳さんのような影響力の大きな方が発信することは、苦しむ若者の力になると感じた。

(NHK側)

演劇の全体像をもう少し知りたかったという点については、一言でストーリーを伝えるのが非常に難しい内容だった。どこまで説明すべきか、かなり試行錯誤したが、説明すればするほど、大切な高校生の気持ちを短くすることになるので、今回は演劇に取り組む子どもたちと柳さんの思いをきちんと積み上げることに集中した。

「悲しみを孤立させてはいけない」という柳さんのことばは、まさに柳さんご自身の体験からきている。在日韓国人ということでつらい経験をたくさんされたが、そこから救ってくれたのが演劇だった。だからこそ高校生にも同じように体験してほしいと思って今回の演劇につながっていった。それをしっかり感じてもらえてありがたかった。

<放送番組一般について>

○ 12月25日(月)～28日(金)「バビブベボディ」(Eテレ 前9:20～9:30)を見た。8月に放送されてとてもおもしろかったので、新作を見ることができてとてもよかった。今回も貴重な映像がたくさんあり、大変興味深かった。中でも脳の回は、ほかの臓器と違って複雑で目に見えない部分が多いが、シナプスや海馬の役割を子どもにもわかりやすく伝えていたと思う。

○ 12月28日(金)NHKスペシャル「女7人おひとりさま みんなで一緒に暮らしたら」(総合 後10:00～10:45)を見た。独身の高齢女性たちが、マンションの部屋を別個に購入し、それぞれの部屋を行き来し見守り合う共同生活を実践しており、女性として素晴らしい経歴を生きた方たちの生活を見ることができてとても興味深かった。成功した女性でもさみしさや悩み、不安を抱えていることがわかり、心に

響くことばがたくさんあった。今後もさまざまな試練があると思う。これからどんなふうに生きていくのかなど興味を持ちながら視聴した。

- 12月30日(日) Yスペ! 「長州と会津～明治150年 未来への模索～」(総合 前10:25～10:55 福島県域)を見た。戊辰戦争で戦った長州藩と会津藩の人々。今も根深い遺恨があるとされ、行政の交流はほとんど進んでこなかったが、東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故をきっかけに民間で新しい関係が生まれているという内容だった。過去に左右されず、未来をしっかりと見据えて今の自分たちを変えようとしている高校生たちのまなざし、若い人たちに焦点を当てて描かれていて、希望を持てる内容だった。山口放送局で制作された番組を福島県で放送したそうなので、地域を越えた比較を見せてもらえてとてもよかった。

12月31日(月) 「第69回NHK紅白歌合戦」を見た。福島市の女子ダンスチームが登場したり、嵐が飯舘村を訪ねる企画があったり、東日本大震災の被災地への思いが伝わる内容がありとてもよかった。最後には、サザンオールスターズも出演し、大変な盛り上がりで見応えがあった。

- 「NHK紅白歌合戦」を見た。歌の喜びと力を感じたすばらしい内容だった。北島三郎さん、MISIAさん、松任谷由実さん、サザンオールスターズなど、NHKでなければできない共演が見られ、涙が出るほどうれしかった。ところどころ、裏方が映るなどのミスも見受けられ残念だったが、生放送のよさでもあり、ドキドキハラハラしながら見た。子ども向けの企画もあったが、NHKの放送の歴史の中で子どもの教育はとても重要なもので、それを紅白歌合戦という番組の中で取り入れたことはとても意義のあることだと思う。

- 「NHK紅白歌合戦」は、演出が工夫されていて、すばらしかった。特に終盤にかけて内容が濃く、さすがNHKだなと感じた。ただ、人によってはにぎやか過ぎてあまりよくなかったという意見も聞いたので、人によって感じるころは違うのだと思った。勝敗を考えながら家族で楽しみながら見られる内容であった。

- 1月1日(火) 新世代が解く! ニッポンのジレンマ 元旦SP 2019 「“コスパ社会”を越えて@渋谷」(Eテレ 後11:00～2日(水)前0:59)を見た。さまざまな業界でトップクラスの30代の論客たちがディスカッションする番組で、発言内容に片仮名が多く、よく聞いていないと理解できない部分もあるが、内容が多岐にわたって

いて、とても興味深く見た。これからコストパフォーマンスが悪いものや数値では
かれないものに価値が出てくる時代になるなど、共感できる意見がたくさん出た。

出演していた若い世代がこれから日本を背負っていくという意味で頼もしい気が
した。

毎回、人選が多岐にわたっていておもしろいので、さらに別の分野の方を集めた番
組を期待している。

- 1月2日(水)「究極ガイドTV 2時間でまわるヴェルサイユ宮殿」(総合 1:06
~3:05)は、映像がとても美しく、2時間番組だったが、いっきに最後まで見るこ
とができる。コースの案内や歴史、背景など細かい説明もあり、そこに行きたいとい
う気持ちよりも、番組だけでも満足できるすばらしい内容だった。画像の美しさだ
けではなく、臨場感があり、本当にその場所にいる気持ちになれて、これからのテ
レビの先に行く番組だったと思う。
- 1月4日(金)ファミリーヒストリー「宮藤官九郎～人の中で人は育つ 亡き父の
教え～」を見た。「ファミリーヒストリー」はゲスト本人も知らない家庭の歴史を説
き明かしていく番組で、画面の右上に常にゲストの表情を映し出す演出がとてもい
いと思う。番組の後半は、父親の人柄に焦点を当てた内容だったが、とても興味深
かった。宮藤さんには見せなかった父親の姿を見たときの動揺と驚きが伝わってき
た。人を楽しくさせることに長けていたという父親の周囲の評価を宮藤さんも知ら
なかったようだが、やはり血は争えないと思った。大河ドラマ「いだてん」は、宮
藤さんの脚本なので、この番組を見たらさらに興味が増していくと感じた。
- 1月6日(日)大河ドラマ「いだてん～東京オリムピック噺(ばなし)～(1)「夜
明け前」(総合 後 8:00~8:58)は、ストーリーの疾走感、爽快感、わくわく感がみな
ぎっていると感じた。1回目の内容で登場人物を全て出して、視聴者に期待感を抱
かせたというのは、おもしろい手法だと思った。綾瀬はるかさんの明るさも際立っ
ていてとてもいいと思った。ぜひ2020年の東京オリンピックをさらに盛り上げるよ
うな番組になってほしいと感じている。
- 大河ドラマ「いだてん～東京オリムピック噺(ばなし)～(1)」を見た。前半主
役の金栗四三さんは、あまり知名度のない人なので、番組に影響しないか心配だが、
宮藤官九郎さんの脚本なので、おもしろくて親しみやすい内容になると期待してい

る。

オープニングの音楽の映像で、「いだてん」の文字の上を3本のピンクの足のイラストがぐるぐる回っていたり、阿部サダヲさんが背広姿で泳いでいたり、東京オリンピックの名シーンが登場するなど、期待感の持てるものになっていた。第1回目は、全ての登場人物が出てきて、人物相関図を見ていないと理解できないのではないかと感じるほどだった。一番印象に残ったのは、金栗さんが走るときのスースー、ハーハーという息の音。大きくなったり小さくなったりする音がマラソンを印象づけるいい演出だと思う。今後の展開がとても楽しみだ。

- 1月6日(日) NHKスペシャル「サグラダ・ファミリア 天才ガウディの謎に挑む」(総合 後9:10~9:59)は、4Kカメラを使ったり、上空からドローンで雄大な景観を映し出したり、NHKならではの番組だった。芸術工房監督として40年ほど前から建設に関わってきた外尾悦郎さんを追いかけたドキュメンタリーだった。スペイン人と日本人の感覚は果たしてマッチしているのかと疑問に思いながら見ていたので、なぜ外尾さんがそういう立場につくことができたのかという説明をもう少し詳しくしてほしい。建築資料がほとんど消失した中で、作り手が工夫をしながらガウディに真摯(しんし)に向き合っている様子がうまく表現されていてよかった。

- NHKスペシャル「サグラダ・ファミリア 天才ガウディの謎に挑む」を見た。
今回の番組で、サグラダ・ファミリアを作ろうとしたガウディの意図がはっきりと示されたのがよかったと思う。また、ガウディが路面電車の事故で亡くなったなど、聞いたことがない話が多く、非常に興味深かった。外尾さんが苦悩していた色使いについて、グラデーションがキーワードになると分かったシーンがよかった。
人間が境目をつくっているだけで、自然には境目ない、色使いも境目がないグラデーションにすることだった。「やっと見つけた」という外尾さんのことばが非常に印象的で、外尾さんが制作に邁進する意気込みが感じられ感動した。ぜひ今後も取材を続けて完成までを番組で紹介してほしい。

- 1月7日(月)グレーテルのかまど「新春をことほぐ 花びらもち」を見た。瀬戸康史さんが毎回さまざまなスイーツをつくる番組だが、簡単なものばかりではなく、かなり手の込んだものを作ることもある。今回はごぼうを砂糖と水で煮て一晚漬け込むところからやっていて見応えがあった。毎回、でき上がったスイーツがどれも

おいしそうで、しかも人気のある俳優の瀬戸さんがつくるという設定がとてもいいと思う。

- 1月8日(火)イッピン「悠久の時が生む 漆黒の器～宮城 雄勝石～」を見た。雄勝石の生成過程が図解でわかりやすく説明してあったり、実際に石を削る様子を拡大して撮影してあったり、わかりやすく見せる工夫が番組の随所にあったと思う。石の盃について、硯が昔ほど売れなくなり、料理用のプレート皿など別の製品に活路を見出していく中で生まれてきた新しい商品だということも詳しく紹介されていてよかった。企業秘密の部分もある中で、石を削る非常に高い技術を持つ工場も紹介されていて興味深かった。石の盃は、2016年に仙台で開催された7か国財務大臣・中央銀行総裁会議のレセプションで披露されたことや、去年、イギリスのビクトリア・アンド・アルバート博物館のコレクションに収蔵されたなど、エピソードも紹介されるとよかったと思う。

- 1月11日(金)東北ココから「宮城で就職を夢みて～アジア系留学生たちの実態～」を見た。外国人労働者の受け入れが、今社会的な問題になっている中で、タイムリーなテーマを取り上げたと思う。主にアジアから留学生が増えているようだが、留学生イコール低賃金の労働力として捉えてしまう悪い傾向が根づいているように思う。政府の明確なビジョンがないままに漫然と留学生を増やしてきたための弊害が出ているのと思う。そういう中でアルバイトと勉強に必死に頑張っている留学生を応援したいという制作側の意図も感じられて、共感できる部分が多かった。この問題は非常に根が深く、どう解決に向かうのかわからないが、このような難しい問題に直球でよく取り組んだと思う。

- 1月11日(金)「東北ココから」を見た。宮城県にいる外国人留学生が全国で5番目に多いという実態を初めて聞いてびっくりした。留学生の苦勞している姿や、留学生を採用したいと考えている企業側に現状を伝えたという面で非常によかったと思う。留学生の多くは、日本語学校で学んでいるが、卒業してもすぐに就職につながらないので、その先に専門学校を案内されるということだった。その専門学校の知識が採用を考えている企業のニーズに合っているのか疑問もあり、単に問題の先送りをしているようにも見えた。留学生に日本で働いてもらうために、もう少し制度や受け入れ体制を整えてあげる必要があると感じた。

また、留学生を採用したいと思っている企業の意見をもっと出したほうがよかったと思う。今タイムリーな話題で、まさに地元の中小企業の人手不足を解消するためには非常にいいテーマだったと思う。

○ 1月11日(金)ドキュメント72時間「新宿・音楽スタジオ ぼくらがバンドを組む理由」はおもしろい番組だった。新宿にある24時間営業の音楽スタジオに集まるさまざまなミュージシャンの姿を描いていた。アマチュアミュージシャンだけでなく、大学時代の仲間同士や工事現場で働いている人など、さまざまな年代の人が音楽をやるために集まってくる。さまざまな人たちの人間模様が出て非常におもしろかった。音楽スタジオに集まるという設定というのが新鮮で、音楽スタジオが一つのコミュニティーの場になっていることを知ることができてとてもよかった。

○ 1月13日(日)明日へ つなげよう「西日本広域災害 最後の一人まで」を見た。災害ボランティアについて、ブルーシートを張るテクニカルボランティア、ボランティアの調整をするボランティア、学生ボランティア、自治体の対口支援などについて分かりやすく取り上げていた。ボランティアというと、力仕事をやりに行くようなイメージが根強くある中で、こういう視点で番組をつくったことはとてもよかったと思う。ボランティアは災害が起きるたびにいろいろな分野が出てきて日々進化していると感じている。ボランティアが自治体や大学、地域住民などとのつながりで活躍できていることを知ってもらえるいい番組だったと思う。

○ 1月13日(日)NHKスペシャル 東京ミラクル第1集「美食の街 受け継がれる“築地の魂”」を見た。訪れた外国人が驚く、さまざまな東京のミラクル現象を取り上げるシリーズの1回目で、築地を軸に東京の食文化をテーマにしていた。築地の仲卸(なかおろし)の人たちの誇りをうまく引き出して、東京の食文化、ひいては日本の食文化にその人たちの思いが息づいていることがよくわかる内容だった。現代の若者がタイムスリップして戦後の築地に行くという演出になっていておもしろかった。

第2集のテーマは、鉄道ということで、期待している。

○ 1月14日(月)ひとモノガタリ「ハカチョウの涙」(総合 後6:05~6:34)を見た。神奈川県横須賀市役所で、引き取り手のない無縁遺骨をできるだけ身内の人に返していくために奮闘する生活福祉課の北見万幸担当課長の話だった。生活保護の人

が増えている今、現場は大変忙しいと思う。それでも人に寄り添うことを大切にしている北見さんは、自治体の中では変わり者だと言われているかもしれない。その北見さんが、自分のさまざまな人生経験を経て、今の仕事に打ち込むようになったということが上手に描かれていたと思う。

- アニメ「ピアノの森」第1シリーズの再放送を見た。絵がとてもきれいで、ピアノの音もすばらしい。ピアノを弾く部分は、モーションキャプチャという技術で、実際にピアニストが弾いている映像をCGで埋め込むという方法をとって、本当にリアルにピアノを弾いているようなアニメになっていて見応えがある。ピアノの音源も登場人物のキャラクターに合わせて、若手のピアニストや世界的に有名なピアニストが弾いているということで、見どころの一つだと思う。第2シリーズも期待している。

- 「にほんごであそぼ」は、とてもおもしろい番組だと思う。今日の名文、狂言や歌舞伎などの古典芸能を見せながら古文の紹介をするなど、日本語の楽しさを小さい子どもたちに伝えている番組だ。その中に野村萬斎さんや中村勘九郎さんなど人気のある一流の人が登場しているのも魅力的だと思う。鼻濁音がきちんと書けない子どもたちが増え、日本語が乱れている中で、この番組はとてもいい内容なのでぜひ続けてほしい。

NHK仙台放送局
番組審議会事務局